

## 34 旅立ち着は整えられて

医師・柏木哲夫氏の調査報告で「死という言葉にどんな感じを持つか」との問いに、老若合わせて「さびしい」三九・四%。「こわい」二七・五%。老人だけの部では「さびしい」が四七・七%で最も多かった(同氏著『生と死を支える』)。

私事ながら、私も心臓冠状動脈の手術を控え、夜半もの思う時、死は「こわくさびしい一体のもの」の極限だ、とつくづく思いました。

死を予想する時、あれも残したままと、欲望無限の想念に自らがふくれあがるのに驚きます。わずかに、死ねば許されるという勝手な慰めが私をいつの間にか眠りにつかせてくれます。

終章に近づくにつれ、これまでの数節は死の姿を描いてきました。良寛和尚は、「若い人はこころ弱きものぞなぐさめ給え朝な夕なに」と歌いました。死

に臨む高齢者にこそ「なぐさめ」「支え」が絶対に必要です。旅立つ間際の悲しみの家族の顔、「苦しかろう」と手を握ってくれるしか術のない愛しい人のしぐさ、それが最高の支えです。

ついでに柏木氏が、ある大学病院の看護婦百五十人に対して「自宅で死ぬない時は、いま働いているこの病院で死にたいか」と質問したら、全員が「ノー」とのことでした。「大学病院でだけは死にたくない」。さすが専門家たちで、理由はいろいろ科学的ですが、要するに濃厚治療ばかりで、患者が一番必要とする最後の精神的支えが皆無ということでした。

さて、また任運荘の例――。

ホームの囑託医は隣接の町立総合病院院長兼任で、両施設の看護状態を熟知され、終末期は頻繁な往診をするので、住みなれたホームで看護するのがよいとされます。しかし、いずれれを選ぶかは、ご本人や家族にまかせます。工藤テイさんの場合でした。テイさんは絶対、任運荘を選びました。そのことで家族は病人そっちのけで医師、看護婦に当たり散らしました。ついに意識混濁。しか

し、再び目ざめた時の最後のひとこと——「ああ、まだ生きていたのですか。寮母さんありがとうございます。おせわになりました」。

その言葉に立ち会う職員は皆、声をあげて泣きました。単に壮絶とも静謐せいじつとも形容されず、肅然、襟を正さしめる光景でした。工藤さんは、実は任運にんうん荘の支柱でした。わがホームにとって空前、おそらく最後の人物です。

荘が評判になり実習生が全国から来訪し、希望するまま、おしめ換えもさせたら、「私はこの職員以外に換えてもらいたくない」と。まこと、任運にんうん荘続く限りの金言です。まくら元の札に病名、要おむつなどの介護状況が記されていました。「あれを外してくれ」との要求です。たしかにそうです。何のためか。の掛け札か。職員が覚えておけばよいのです。このように毎日が教わることばかり。そして、息絶ゆる時、他人である寮母に死の床から「ありがとうございます」と。さながらみ仏です。

高山ヨシさん（八八）は寮母室隣の個室に移って三カ月。出勤する寮母はまず「ご気分いかがですか」と尋ね、手を握る。うっすら目をあげ、また眠りに

還る。老衰、仏のみ胸に静かに抱かれようとしています。「高山さん、旅立ち着はここにちゃんと用意してありますよ」と、包みに手をそえます。「はい」。口がかすかに動きます。心なしか笑みも浮かべて。すぐ目はとじられる。目をあけることが返事であり、あいさつです。

大切な包みは、ひもをかけて「先の世へのたびだちぎ」と毛筆の札。高山さんは能筆でした。包みの四方に「旅立着」。すぐ分かるための生前の配慮です。包みの中に白絹の長着と下着、そして若き日の美しい写真、老いても物腰に品位がそなわっていました。「夫が死んだころの私の写真。これを持っていかな」と、こんなに年とって主人が見忘れていると困りますから」とほほ笑んでいました。ここには死を受容する者の心配りがあふれています。

前節の神田シメさんはこのままが極楽と言ひ、工藤テイさんは寮母への感謝の言葉を残し、高山ヨシさんは旅立ち着にふれて安らかに旅立ちました。

みすばらしい任運荘、ただの人たちの集うわがホーム、難波船にも似て心身疲れ果てた老いの集団。それでもここは天国へ旅立つのにふさわしい、この世

での一番の憩いの港でなければなりません。そうでなければ、任運荘はないに等しいのです。

〔付〕――

『死線を越えて』（工藤テイ 七一歳）

――私が手足の自由を失ったのは昭和四十一年十月でした。山に仕事に行く途中転倒したのです。医者から「頸骨を痛めているのでけん引をすればよい」といわれ、直ちにけん引しましたが、首は痛くなるばかりです。また、手術をすれば治るとの言葉に、一刻も早く治りたい一心から手術を受けました。

ところがある日、食事中ポトリと箸を落としたのです。私は思わずお膳をつきとばしました。千尋の谷からつき落される思いでした。主人は箸がなければ食べられないのなら、わしが箸になるからと慰めてくれますが、私はその時から死を考え始めました。人のためにならず生きていくことは耐えられなかったのです。カミソリで動脈を切って死のうとしましたが、見つけれられ、捨てられてしまいました。それから一日に牛乳一本しか摂らず、次第に痩せ、死に近づくことを急ぎました。

ところが、その頃、福祉事務所のKさんの紹介でこの任運莊をお世話されたのです。私は家を出る時、泣きました。辛抱して五人の子供を大学にやり、主人にもできるだけのことをしたのに、何故私をうば捨て山にやるのかと。しかし、やがてそれは私の考え違いだったことに気がつきました。寮母さんたちから優しく迎えられ、家では寝たきりの毎日でしたが、起きて食事をもめまいがしなくなりました。車椅子で広場でのリハビリにも出ます。また、働くことのみで歌など作ったことはないのですが、園長先生のすすめで短歌を作ること覚えしました。寮母さんのお昼の休憩時間を短歌作りに当てます。時間のたつのを忘れます。夜眠れぬ時も三十一文字に心の中を綴り、夜勤の寮母さんに書きとめてもらいます。

こうして今では毎日が充実し、皆さん方のおかげだと思って、天寿を全うするよう努力を続けております。(任運莊での生活―五年三カ月、七三歳で死亡)